

【巻頭言】

年頭にあたって

会長 神澤 良明(43 回生)

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

新しい年を迎え、皆様には益々御健勝のことお慶び申し上げるとともに学友会に御理解、御協力を賜り感謝申し上げます。

昨年は開学 85 周年の年で大学・学園では 85 周年記念誌を発刊した。この記念誌の編集を西谷副会長が編集委員長として担当し、編集委員には学友会から山田名誉会員はじめ桮藤前会長、遠山理事、神澤が協力した。

記念祝賀会は学友会が主催することとなり、実行委員長に西谷副会長が、副実行委員長には村上晃司氏(短大 1 回生)、皿谷弘樹氏(短大 2 回生)が就き、その責務を果たした。今回の祝賀会を短大生全体の同窓会という位置付けで行いたいという西谷実行委員長の発案で、各学年から実行委員を選出し、参加を募った。その結果、短大卒業生約 170 名の参加を得た。遠方よりの参加もあり、短大生卒業生が全参加者の約 6 割を占めた。少しの動機付けでこんなにも多くの短大卒業生が集まったのだと感動を覚えた。

以前から学友会の集まりではレ専校、専門学校時代の卒業生は多く集まったが、短大卒業生の参加は少なく、このままでは学友会存亡の危機だという声もあった。学友会の若返りを言われて久しいが、今回の祝賀会の参加者を見て安心した。今回の祝賀会で歴史の重さを実感した。歴史は一朝一夕に培われたのではない。歴代の先輩たちが日々努力した結果なのだ。

私はレ専校を卒業して良かった。レ専校の卒業生であることを誇れる。これも先輩が築いてくれた伝統があるからそう思えるのだ。私はこれからの学友会について、今まで先輩たちがやってきたように引き継ぐだけで良いのだ、これが伝統だと感じた。

さて、日々の努力ということで『日々是好日』(にちにちこれこうじつ)と云うことばを思い出した。これは、中国は唐時代の禅僧である雲門和尚の言葉で、禅を勉強しなくてもこの言葉を聞いたことのある人は多いと思う。

花園大学学長細川景一師は著書「白馬蘆花に入る」で『私たちの人生は雨の日もあり、風の日もあり、晴れの日もあります。しかし、雨の日は雨の日を楽しみ、風の日には風の日を楽しみ、晴れの日には晴れの日を楽しむ。すなわち楽しむべきところはそれを楽しみ、楽しみ無きところもまた無きところを楽しむ、これを日々是好日というわけです。どんな苦しい境界に置かれても、これ

好日、結構なことですと、カラ元気でなく心から味わえるようにならなければなりません。』と説いておられる。

私のような凡人には苦しい環境におかれて、その環境を心から楽しむことはできないが、一日いちにちを精一杯の努力することはできる。

私自身はこのことば、『日々是好日』を次のようにとらえたいと思っている。即ち、いちにち一日を悔いなく生きる。一日を振り返って、今日も一生懸命努力した、と思えるような一日を過ごす。今日はかけがえのない一日であるから、より充実した一日として生きていくところに、この「ことば」の意味があると思う。

先輩に築いていただいた伝統を、会員ひとり一人が『日々是好日』のように過ごし、これからの卒業生のためにも学友会の伝統を更に益々培って、大学のさらなる飛躍を願いたい。

最後に皆さま方の益々の御活躍と御健康をお祈りし、新年の御挨拶とさせていただきます。

以上

